

統計により数字が一様ではないが、世界では年間六三億トンの食料が生産され、その四〇%の二五億トンが廃棄されている。これは二〇億人の食料に相当する。日本では国産と輸入を合計して八四〇〇万トンの食料が供給され、二〇%の一七〇〇万トンが廃棄されている。食料不足の国々への食料援助は世界全体で年間四三〇万トンであるから異常な数字である。

日本では年間八二万トンの衣服が市場に供給される一方、五一万トンが廃棄されている。しかも八二万トンのうち八〇万トンは海外からの輸入である。日本では毎年八〇〇〇万本程度の安価なビニール製傘が供給され、大量に廃棄されている。様々な素材で構成されているので処理が容易ではなく、大半は埋立て処分されている。

これら大量生産、大量流通、大量消費、そして大量廃棄という現代社会を象徴する構造を転換させる活動が活発になってきた。不要な物品を廃棄する活動はダウンサイクルと命名されるが、不要とされるモノやサービスを有用な商品に転換させる仕組はアップサイクルと名付けられ、環境時代を背景に注目されはじめている。

実例を紹介する。青森ではジュースを搾液したリンゴのカスが大量に発生するが、従来は家畜の飼料か畑地の肥料として一部が利用される程度であり、大半は廃棄されていた。それを加工して「リンゴテックス」という布地にしたところ、航空機内の座席のヘッドレストカバーとして使用されるようになった。

東京でサンドイッチを自家製造している商店では、使用しないパンの端部が毎週数十キロになっていた。それを原料としてビール製造会社がビールにしたところ、独特の風味があり人気商品になっている。食品ごみを大量に処理する装置として、低温低圧で発酵させてガスと液体肥料を発生させる小型装置も発売されている。

衣服についても廃棄を削減する流通の仕組みが登場している。ある東京の衣服の店舗では数十種類の見本だけが陳列されており、注文すると製造して三ヶ月後に商品を手渡すビジネスを開始しているし、古着を持参すると、低額の料金を店舗に陳列してある古着から同等の枚数の古着と交換できるビジネスも登場している。

これまで家庭電化製品を購入すると、使用していた製品は粗大ゴミとして有料で廃棄する必要があった。ところが、ここ数年のコロナウイルスの蔓延で自宅での勤務が増加し、家庭電化製品の需要が急増したが、集積回路不足で製品の製造が対応できず、販売会社が回収した廃品を修理して再販する商売が活発になっている。

数十年前に江戸時代を見直す流行があり、三R(リサイクル、リデュース、リユース)が話題になり、「もったいない」という日本の伝統精神も世界に流布した。実際、江戸では人糞も馬糞も有料で回収して肥料とし、使用できなくなった提灯も雨傘も修理して商品に再生する商売が成立し、廃棄されるモノはほとんどなかった。

現生人類の直系の祖先の登場を二〇万年前とすると、その〇・一%でしかない直近の数百年間で、人間は森林や草原の半分以上を農地や牧地に転換し、化石燃料という貯蓄を消費しようとしている。それらの活動に共通する性質はダウンサイクルである。これをアップサイクルに逆転させる時代が登場してきたが、日本の江戸時代は実践していたのである。